

『鶯宿雑記』内容紹介と索引

田口栄一

はじめに

第I部 内容紹介

1. 編者駒井鶯宿とその家族
2. 久松松平家
3. 鶯宿雑記
 - (1)序文

(2)書誌的事項

(3)叢書書写の背景

(4)内容のあらまし

(5)記事あれこれ

第II部 鶯宿雑記事項名(五十音順)索引

はじめに

ここに紹介する資料は、久松松平家の家臣で、幕閣老中筆頭を勤めた松平定信に30年程も仕えた駒井鶯宿が、長年にわたり書き留めた叢書で、自らの号を書名に付して『鶯宿雑記』と名付けた、600巻に及ぶものである。よく利用されるが、利用請求の際に、とまどう事の多い資料である。

『国書総目録』第8巻中の叢書の巻に巻別の総目録が収録されており、更に、その内の主要な成書類は、当該の各巻に分

出掲載され、書名で検索出来る様になっている。しかし、何巻に収録されているかを調べるのは、簡単でない。今回、事項名(五十音順)索引を作成したが、資料を通覧したので、その際目に止った記事を併せて紹介する。

本稿は、これに白河市や桑名市等、関連する地域から出版されている、郷土史資料から得た教示を加えて、まとめたものである。

第I部 内容紹介

1. 編者駒井鶯宿とその家族

編者の略歴は、桑名市内の寺院、長寿院にかつてあった彼の墓銘に依り、知る事が出来る。これは、同院に現存しないようであるが、幸い『桑名市史・補篇』に、全文が収録されている。これに、本叢書や桑名郷土史資料等から知り得た事

柄を加えると、その人物は次の如くである。

駒井鶯宿 名は乗邨^{のりむら}、字は君聚、通称を忠兵衛と称した。鶯宿の他に、春院・梅軒・喜叟の号がある。明和3年(1766)に、久松松平家の家臣、田中忠右衛門の次男として奥州白河に生れた。駒井家を継ぐが、初めは90石取で、馬廻り、以後

は大小姓、記録役、使番、物頭、用人、奉行、郡代、鉄砲頭、宮奉行、大目付、江戸詰奉行を歴任し、この間に20石の加増を2回受けて、130石取となり、江戸家老の欠けた時は、その職務を兼ねたという。この間、主家が、白河から桑名へ転封された際は、先発して庶務を經理した。又志摩国の窮民が蜂起した時は、鉄砲頭であったが、四日市へ赴き、進止したという。70歳の時に大目付を勤め、藩主の東勤に従い護衛をなす。この後に、江戸で家老の職を兼務したのである。『雑記別録 卷37』に天保15年（この年改元、弘化元年）正月、大病と書き入れがあり、この時79歳である。間もなく、老いを理由に辞し、弘化3年（1846）1月20日に、御帳の為登城したが帰宅後、中風が起り、同月22日に没した。享年81。仕えた主君は、定邦から定信、定永、定和、猷に至る5代、在職する事、実に68年に及ぶと墓碑にある。

博く書籍を渉猟したのは、勿論であるが、『桑名人物誌』によると、書写したものの『鶯宿雑記』と合せて、千余巻に達したという事である。かかるが故に、藩内で、その博識を知られ、中でも歴史・和歌・俳諧の書物を好み、徳川家や松平家に関する故事来歴、戦記物に精通していたという。

和歌は、水野為長（歌人萩原宗固の次男・田安家の水野氏を継ぐ。田安家からの定信の附人。定信の信頼が特に篤かった。）を師とし、俳諧は、当時奥州方面でも盛んであった、蕉門の3世雪中庵の影響を、実父共ども受けて宗匠と立てられた。

地誌・風俗への関心も、ひととおりでなく、遊歴には、紀行文をものしている

が、その様な関係からであろうか、屋代弘賢が『諸国風俗問状』を諸国へ発した際には、白河領分の担当を同藩士田内月堂（定信側役）から依頼され、土地の古老の協力を得て、編集回答した。他に、『白河風土記』の編纂作業へ参加している。定信をことのほか尊崇していたと思われるが、遺事撰修作業にも従事したという。書画の嗜みもあり、その収集するところ藩主から鴻儒・碩学のものに及んで、夥しい数であったという。趣味は、囲碁・謡・釣を好んだようで、本資料中にも散見する。

次に家族を見ると、実父田中忠右衛門は、本資料巻7の「二鳴尊靈を吊ひ奉る言葉」に依ると、通称を忠右衛門、名は由庚、字は子道、号を文華斎、俳号を四序亭二鳴、といい、文武にすぐれ、武は弓、炮を好み、弓は師範を勤めた。俳諧は、蕉門に入り、3世雪中庵蓼太の弟子となり、白河では俳諧の3棟梁の一人といわれ、数々の名句を世に知られた。鶯宿は、その死に際し、別れの悲しみを、哀切極りない言葉で述べている。

養父は、官太夫と称し、号を鸚鵡斎といい、俳号を一口といった。鶯宿は、秀村尊靈と記している。

妻は、名を園、春景と称して、舅の娘である。文政10年（1827）5月に没する。60歳、鶯宿時に62歳。「性慈有恩」と墓碑に有る。

子は、男女1人ずつを持ったが、男子武吉は20歳前に亡くなった。その時既に娘は、藩内でも知られた学者の家柄である南合家の義路に嫁いでいて、跡取を失なった為に、40歳を越えてから、家老奥平貞親の3男を養子としたが、病が多く、実家へもどす。幸いにして、嫁いだ娘が

子を多く持った為、その次男晩翠を養子とした。

駒井晩翠 幼名を多忠、名を重倫、又は嶽、字を理郷又は岱宗、号を晩翠、玉山、水月、麗沢堂主人と称した。南合義路の次男、鶯宿にとっては孫である。藩儒広瀬蒙斎に師事し、9歳にして四書五経を読破、拔群として主君より賞された。経史詩文に博く、尤も経学に精しかった。容貌豊偉、言語俊弁にして才気人に優れ、俊童と称せられた。酒を好み、酔うと詩を賦し、筆を揮い、時に慷慨激論をなし、時に笑談詠諧をなしたという。その人となり温厚、争うことがなかった。まさに鶯宿はもとより、藩内の期待を集めた偉材であったが、肺を病み、天保5年(1834)8月2日、享年26、後に老養父、妻、幼児3人を遺して没した。弟の半林が輯録し、親友小野損庵の序した遺稿が、伝えられたという。(『桑名人物誌』、『雑記別録巻34』中の「高雲院七回忌追悼」)

鶯宿は、息子、妻に先立たれ、今又この悲しみにあった。老いの身に中心いかばかりであったらうか。遺児が幼い為に、弟の半林をもって跡継とした。時に鶯宿は、古稀に達していたのである。遺児は、半林の子とした。

駒井半林 晩翠の弟、初名を知周、後に重周、通称を、強介又は丹下、後に忠兵衛、字は濟夫、号を半林、晩芳、貫園逸民と称した。文武に志し、経学に精しく、詩歌や書をよくしたという。奉行となったが、中風症に罹り退く。読書詩賦を事として生涯を終り、詩稿が多く遺されたという。

なお、この跡は、半林の長男重格が継ぐ。慶応3年(1867)、歳わずか15歳、間もなく起きた鳥羽伏見の戦で、会津と共

に幕軍の主力をなした桑名藩は、藩主定敬が、戦後も恭順せず、長岡・会津・函館と転戦して帰国しなかった為に、藩内は混乱を極めた。重格は藩主と共に従軍するが、負傷して帰藩した。後、幼主松平定教の随員として渡米留学。帰国後は、専修学校(現専修大学)の創立に参加した外、教育に生涯を捧げ、高等商業学校(現一橋大学)長等を、又官界にあっては、大蔵省、農商務省の、局長等も勤めた。明治34年(1901)に没する。48歳であった。

更にこの跡は、次男の重次(明治28年~昭和48年)が継いだ。この叢書はこの人の名で、当時の帝国図書館へ寄贈された。大蔵省を退官後、衆議院議員や公認会計士会会長を経歴された人物である。

2. 久松松平家

編者の主家久松松平家について、簡単にふれておく。この家は、久松松平家の分家ではあるが、家康の異父兄弟、久松定勝の3男定綱を祖とする名門で、領地は、下総山川を始めとして、常陸下妻→遠江掛川→山城淀→美濃大垣→伊勢桑名→越後高田→陸奥白河→伊勢桑名の各地を所領とした。編者は、生れてから壮年期迄を白河で、その後、死する迄桑名で過ごした。前者は、寛保1年(1741)から文政6年(1823)までで、藩主は、7代目である定賢から定邦・定信・定永までの4代、後者は、文政6年から廃藩置県迄、定永・定和・猷・定敬・定教の5代である。

藩主の内、祖定綱と定信は、著名であり、特に家臣や領民の尊崇を集め、神として、桑名市内の鎮国守国神社へ合祀さ

れている。この叢書には、とりわけ、この両者の時代の書留・記録が多く、文中に前者は鎮国公、後者は守国公云々の書出で記載されている場合が多い。定綱は、家康から特に目をかけられ、又その期待に応える働きが多くあった人物である。定信は、周知の如く、田安家から入り、領主、政治家、文人として活躍したが、幕閣としてはともかく、領主として白河領で行った治政は、特筆すべきものがあり、中でも飢饉対策は著名であるが、更に文武の振興、特に藩士に対する教育や学術の奨励策は、大きく結実したといえる。宝暦8年(1758)に生れ、文政12年(1829)に72歳を以て没したが、鶯宿には8歳の年長者であった。安永3年(1774)17歳の時、定邦の養子となり、天明3年(1783)藩主となったのは、26歳の時である。文化9年(1812)に致仕し、嫡子定永へ家督を譲るのは、55歳の時で、以後は、文化活動を専らとする。鶯宿は、主君の内、定信に最も長く約30年間仕え、その青年期、壮年期をほとんど共に過ごしており、よきにつけ、悪しきにつけ、受けた影響は、すこぶる大なるものがあると思われる。鳥羽伏見の戦に際して会津と共に幕府方の主力をなしたこの藩は、賊軍として処せられるという、悲劇的結末を迎えるに至るが、この前後に受けた有形無形の傷跡は、はかり知れないものがあり、定信以来の藩校、立教館の蔵書も又、多くが流出するという憂き目を見るに至る。

3. 鶯宿雑記

(1) 序文

巻1の巻頭に序文がある。書写の動機、

目的、予定の収録範囲等を知る事が出来る。大略は、次の通りである。

まず、「看書の癖有」が故に、「朝暮座右に書のあらん事」を欲している。しかし、学がない為に、「唐ふみ」は読むことが出来ない。「大和ふみ」の内、上古のものは、読んでもその心を得られない。又読みやすいもの、理解しやすいものでも50歳代にかかって、記憶しておく事が難しくなった。今後も読書は続けるのであるから、子孫の為にもなり、珍らしく、面白いと思える事は、「雅俗を論ぜず拔萃」する。神君のいさおし、織田、豊臣時代の嘉言・善行等の類は、輯録した書があまた有り、所蔵しているので、省く事にする。はたの人の物語で、「おかしき」ものは聞き捨てるのも惜しいので記録し、又山水へは、かなり遊行したが、いづくの勝地も、人々の紀行に記されているので、書かないが、しかし、旅の日記から拾い出して、書いたものもある。俳諧をたしなみとしているので、句藻の内から拾いだしたものもある。拙いもので、見た人の謗もあるであろうから人に見せる様なものではない。

この叢書を書こうと思立ったのは、若い頃からであるが、世間も知らず、学識も浅いので、気持だけあって、実行できずにいたが、覚えのうときを助けるの一つであるからと、敢えて筆を採り、『鶯宿雑記』と題して、巻の数がつもらん事を思いはかるのみである。

文化十二年乙亥 正月

鶯宿陳人

みづから題す

文化12年(1815)は鶯宿が51歳の時であるが、この後30年間、600巻を書き続けるのである。

(2) 書誌的事項

自筆の写本であるが、割合他筆の部分もあり、又寺社縁起の如きに刷物もある。

当館請求記号238—1、本録と別録がある。巻数 本録568巻、目録1巻 別録40巻、目録1巻（この内、巻61～70・巻161～170・巻308～310・巻531～540・別録40を欠く）現在576冊、合冊289冊 大きさ 本録、巻1～130は縦25.5糎、横16.5糎、巻131～568は縦24糎、横16糎、別録、縦21糎、横13.5糎 各巻丁数 本録平均50丁、別録約60丁 収録総項目数 約1850 各丁の行数・1行の字数 本録平均22行、1行平均30字、別録平均20行、一行平均30字 なお、欄外や行間にかけて書入れのある丁多し、自己評論や補正したもの等 文化12年から亡くなる直前の弘化1年～2年（1844～1845）頃まで約30年間、書き続けたものと思われ、序文の頃の筆勢は精気が充満しているが、徐々に衰えが見え、別録の終巻頃は、筆に震えが見られる。又、500巻位から後の巻に晩翠、半林によると思われる書入れや書留がかなり見受けられる。編者は能筆とはいい難く、癖字が多い。本録と別録 両者をどの様に書き分けたか、明らかでない。天保10年（1839）頃以降の書留が、別録に多いが、本録にも、天保15年（1844）の書留がある。別録は、江戸藩邸の勤務の時とも考えられるが、なお不明である。表紙 合冊各冊には、帝国図書館作成の表紙が、付されている。元表紙 本録、薄茶色、表表紙左側に、白紙に自筆の書き貼題簽 別録、白に青のくさむら模様、表表紙左側に、白紙に本録と異なる筆跡に依る書き貼題簽 蔵書印 本録巻1～17「駒井氏蔵」、本録総目録、同巻18～568、別録総目録、同巻1

～35「桑名城内／駒井家蔵」、本録総目録、別録全部「東京浅草／駒井家蔵」の朱印が有る。この叢書は、文化12年（1815）頃に、白河で書き初められて、8年前後に、桑名へ移っているから「駒井氏蔵」の押印分は、白河で書かれたかと推定される。約600巻を30年間で書いたから、1年平均で約20巻分を書上げた事になる。すると、白河時代にもっと書いた事が予想できるが、印とこの事情との関係が明らかでない。

第3の印については、明治初年における、駒井家の消息が、明らかでなく、その背景を、知る事が出来ない。ただし、重格は、明治4年（1871）に東京へ出て、本所四ツ目の石合黙翁（田口文蔵）塾に入門している。当時は、浅草七曲に藩邸があったから、この辺の事情と関係があるかも知れない。受入 全巻に、「明治36年4月・寄贈・帝国図書館」の丸形受入印がある。この頃の駒井家は、小石川金富町を住所としていた。

(3) 叢書書写の背景

序文には、文化12年とある。叢書は、この年から書き始めたものであろうか。登載すべく予め準備された書付類は相当な数に上った様で、110巻位迄は、それ等を書継いだ様である。『桑名郡人物志』には、「平居手に筆を釈てず、中古以来の事実、先輩の著書、侯家の事跡、藩士の逸話、1篇の文章、1首の和歌に至るまで、目に触るるに従い、聊かも漏らすことなく手写し」とあるけれども、30年間に、600巻を書き上げるには、筆写はもとより、材料集めも、並の労力ではなかった筈である。かくの如き、大志を持ち、猶且、死する迄書き続けた執念は、何にも

たらされたものであろうか。序文の「子孫や我身の本好き老いの為」等のことわりは、もとより表向のものである。所詮、解き明す事は、出来ないけれども、その一助として、当時彼を取り廻っていた環境が如何なる状況にあったか、見る事とする。

この叢書が、書き始められた文化・文政期は、江戸文化の爛熟期で、幾多の文芸人を輩出したが、これらの人々の間に、『一話一言』や『甲子夜話』の如き隨筆を書く風潮が流行したのである。

藩内でももとより、定信を初めとして、著作や書写を行う人々が多く、特に定信は、致仕後の文筆活動を盛んに行なっていた時期である。彼は、単なる読書に疑問を持ち、例えば、『源氏物語』を7部も書写している。又、記録の保全にも意を用いて老中時代は、幕府の公文書等を整備し、保管を改善せしめている。それに、この藩では、藩士の教育には特に力を注ぎ教授を外から招くなどした成果は立派に結実して、全国でも有数の教育藩として知られるに至る。従って、藩校立教館の蔵書も充実して定信の致仕の頃、2万巻以上を、数える迄に増加している。加えて定信が、藩外の有識者と活発な交流を計った為に、藩内の学術も又盛んとなり、世上に名を知られる人々が多く出る様になった。本人の資質はもとよりの事、かくの如き環境が篤宿を刺激し、その動機となった事はまちがいないであろう。更に、篤宿自身、白河、江戸、越後、桑名を拠点として、各地をかなり遊歴した様で、これが見聞を広め、記事の材料種になっているのである。各藩で、藩士の遊歴をどの程度許可していたのか明らかではないが、篤宿の場合、奥羽地域は、

岩手辺まで、関東は、江戸周辺の各地、近畿地域は、広範囲を巡っている事が、記載されている。加えて、参勤交代等では、幾度も白河から桑名間を往復しているから、行動範囲は、広がったといえるかもしれない。

叢書は、繰り返すが自筆の写本が主であり、購入した写本や版本は、混入していない。成書の内には、購入で補充出来ると思えるものが、少なからず、見受けられるのであるが、とにかく写したのである。しかし、藩内で博識を知られた由縁は、ここにあったのであろう。

(4) 内容のあらまし

この叢書には、短篇の隨筆風記事と、長篇で、半巻位のものから数巻に及ぶ成書まであり、合せて約1850項目が収録されている。

前者には、自らや同僚等の著作、体験記、見聞記及び、各書からの小記事の抜書が、後者は、自らの著作や成書の写しが収められている。両者共に、広範囲の分野の記事を収めているが、強いて挙げれば、和歌、俳諧、地誌、紀行、風俗、日本史(特に戦国期の戦史)、藩や主家の記録、藩主や藩士の著作物や逸話(定綱や定信が多い)、世上の風聞、世上を驚かした事件記録、有職故実、忠臣伝、孝子伝が、主な内容といえようか。しかし、この叢書の特色は、大半が藩や主家やこの地域に関連する記事で占められている関係から、一大郷土資料といえる点であろう。それも、奥州白河及び伊勢桑名周辺のである。両地域における此等資料の原本やその写本等の所在については、ほとんど知るところがないけれども、或は、この内にしか現存しないものが、あるか

も知れない。編者は、あとで執務上役立つようなものを、相当に収録しているから、自分でも便利に使ったであろう。藩内でこの叢書は、よく知られていたから、閲覧の希望者や藩務処理の前例等の照会が、あったであろうかと思われる。

さて、前記した如く、耳目に留るもの総て記したとはいえ、自ら書く可からざるものもあったであろう。この資料は、自身の外、子孫へ見せる為に書いたのであるから主家、主君、藩士、我家及び自分の為に差障りとなる事は、除いたのである。どちらかといえば、後世で役立つのは、この種の資料である場合が、多いけれども、誠に律義が過ぎて、我々の期待を見事裏切っているのである。例えば編者は、定信に長く仕え、年令も近く、上士で筆まめとなると、だれでもこの内から定信に就いて新事実が発見出来るのではないかという期待を持って不思議ではない。しかし唯一の例外を除いて無いのである。無難な表面的記録や記事に終始する。これは、他の件でも同じであり、当時とすれば、やむを得ないかも知れないが、例えば、定信が遺した文化事業は、特筆すべき偉業であるが、これの苦労話や逸話、もしくは、文物探索や教育の裏話でも残してくれていたならばと思うと残念である。これは、定信にとって、名誉な話であろう。

項目を巻別に見て行くと、初めは、自作の見聞記、短篇、抜書が続くが、次第に、成書全部の写しが多くなる。これ等の内には、既に読了したと思われるものが、少なからずある。例えば、巻180~200前後の戦記物や巻230前後の紀行書である。これ等は、編者が、得意とした分野であり、ここに収まっているのは、代表

的図書だからである。更に、これらは、手元へ置くべきもの様に思われ、或は、所持していたものも、更に書写したのかもしれない。天保の終り頃になると、幕府の記録を採る様になる。それ迄は、記録といえば、藩内だったのである。鳥居耀藏の処分記録、シーボルト事件記録、大塩平八郎事件記録等の如き類である。書入れもなく、淡々と採録している。前にもふれたが、主家や主君については、その記録や著書は、他見を禁ずる旨の断り書がほとんどあり、往時の規律を偲ばせると共に、我等の期待が無理である事を再認識させる。面白いのは、これは、誰々所蔵のものから写す等と記載の有る事で、自分は、他人から借りて写しているのである。

各項目には、各々書名が付されているが、丁の半ばや終り等から始まったり、総目録とこの書名とに若干の相違があるものもあり、探すのに手間がかかる。

短篇ものは、半丁位から数丁に及ぶものまであり、色々な文献の抜粋文（恐らく読書後に面白い、役に立つと判断して、取って置いたメモを整理したもの）と、自分や同僚等の見聞や体験記等からなる。序文から判断すると、当初の登載予定は、この種のものであったらしい。これ等の大半は、現代の我々にとって、容易に知り得るものもあるが、この内、編者や先輩、同僚の見聞記等には、見るべき点が多々ある。それも、一文中のわずか数行の内にある場合があり、一様ではない。父、同僚、上司、自分の歌や俳句も混じり、ときには、戯文や戯歌もものしている。反対に実父との死別には、哀切極まりない一文も残している。物見遊山の道の記の外、藩内の人物評や藩内諸

事情も書いているが、秀れた人物や美風、良俗に触れるだけである。主家や主君に就いては、はばかりつつ、かなりの数の記事を取めているが、前述した如く、ほとんどが、無難なものである。しかし、短篇への記載だけに私の認識外の稀な記事が、あるかも知れない。和歌も1首、2首の如く、小単位で詠んだものがかなりあり、既知のものかどうか、研究の要があるかと思う。

長篇のものには、数巻に亙るものもあるが、ほとんどは、1巻に収まる規模のものである。内容のあらまはしは前述の如くであるが、誠に幅広く、あらゆる分野に知識を求めんとした跡が、歴然としている収録振りである。50歳過ぎて起草したにしては、成書の採録数が、多く感じられる事は、前にも触れたが、とにかく、これだけの知識を持ったならば、当時としては、大変な文化人であったといえるであろう。

成書個々を見ると、自ら雅俗を論ぜずと言う如く、俗書も多いが、自ら得意とする分野には専門書もあり、凡そとしては、一般教養的な書を選んでる様である。孫であり、養子でもある晩翠とは違って、専門家たらしめた様子は、見えない収録振りである。ただし、成書の半分近くは、底本が知れず、又知れても所蔵者が、無名の藩士では、善本とは言えないものがある。内には「読み難く、誤字多けれどその倣写す」等と注記があるものもある。群書類従からの写しがかなりあり、藩校本の写しもある。抄文のものが相当にあるし、本来あるべき図画は、ほとんどが、省かれているから、利用には注意を要する。

当然ながら、ここには、藩内とその周

辺における文人の著書が、かなり見受けられる。これらは、当館の場合、ほとんどがこの内で見える事は出来ない。(複製や復刻されたものを除いて)。当館には、中央に知られた人の著書が多いのである。

この叢書は、過去多くの研究者が、対象としたと思われるが、恐らく、全体を調査されたのは、白河や桑名の郷土史研究に携った方々や、松平家を調査された史家達の外多くは、いないであろう。

昭和の初め、森銚三が調査されて、その結果を発表されているが、現在それらは、氏の著作集で知る事が出来る。氏は帝国図書館の所蔵資料中『小宮山叢書』(水戸藩小宮山楓軒他の著書)と『篤宿雑記』から、人物紹介に多くの得るところがあった旨、述べておられる。著作集には、巻253の「智多日記」の記述から、白鷗なる陶工の経歴を知った事、巻348の「大名かたぎ」は、定信の戯作で珍らしく、帝国図書館の外に所在を知らない事等、10件程を報告されている。他に、「よしの冊子」を紹介されている。これは、この叢書の逸品で、定信が老中筆頭在任中に、側近水野為長が、幕閣、大名、旗本等の評判を書上げて報告したものの写しで、近世史上、特筆すべき史料である。

他の方々では、巻2の「兼葭堂話」等を2、3の方が郷土史誌資料等で紹介されているのを拝見している。

(5) 記事あれこれ

ここには、私が、恣意的にメモした記事を逐次紹介する。有意義の記事を採りもらしているかも知れない、又既知の記事の紹介に甘んじているかとも思える。叱正を乞う次第である。

(A) 紀行文 鶯宿作

編者は、紀行文をものすることが、得意であった。交友の間でも知られていたらしく、吉村静軒子には、“心付もあらば申てよ”と文章の添削を依頼されている程である。しかし、型が、従来のもにとらわれ過ぎていて、面白味に欠けるが、一般人の著作としては、見るべきかも知れない。要するに土地々々の故事来歴に、こだわり過ぎるのである。ただし、従来とかく、中央から地方へという視点から書かれているものが多い内で、地方から地方へというのは、地域の持つ紀行文の特色であり、参考となる点が、少ないのである。

編者は、前述の如く各地をかなり遊行した様で、その際日記をつけて、後に紀行文にまとめている。序文にいう如く、その地に著名の紀行文がある場合は、省いている様である。どの紀行文も同じではあるが、文中の1箇所か2箇所にきざりと光る記述があり、注意を要する。

○ 日光紀行 巻3所収

文化7年(1806)4月、日光の祭礼を見んと、柳川氏他2名、計4名で白河を出立、板室で湯浴し、原方街道を行く。高久という里のかつて芭蕉が逗留した宿の主人は、青楓(覚左衛門)といい、当代も同名を称していた。日光の描写が詳しい。35丁程。

○ 会津遊行の覚書 巻5所収

書名の如く、遊行に便ならんとして書いたもので、地誌的にも詳しい。寛政12年(1800)閏4月、首藤氏外1名、計3名で白河から会津へ。14丁程。

○ 真間紀行 巻6所収

寛政8年(1796)3月、江戸から市川

真間へ、同じ心の友と有、8丁程

○ 両岸紀行 巻16所収

天明6年(1786)卯月、20歳、初めて東都在勤をした折の記、八丁堀屋敷から、大川両岸への紀行。4丁半程、恐らく初めて書いた紀行文

○ 奥のみちくさ 巻18所収

白河から奥州各地を巡遊して、南部領附近へ至る紀行であるが、20年程前の日記を整理して、まとめたもの。何時頃に行つたものか不明。途中の例えば、松島等各地の記述が詳しい。巻18全巻を充てている。

○ 越後在番中巡村の道之記 巻25所収

文化3年、白河から越後へ。5丁程、越後分領廻村の記

○ 知多日記 巻253所収

知多日記としたのは、知多郡大野の塩湯に浴するのを、直接の目的とした為である。文政11年(1828)の秋に、桑名から翠閑子、南条蘭堂と同行。13日を要して、美濃、尾張附近一円を巡遊。義朝の廟、大高城址、熱田、名古屋、清州、岐阜、長良川の鵜飼等を見ている。巻253全巻を費している。文中に、「白河にありし日は、隣せる国々の佳境勝地名区奇観を探り…(中略)山水にあそび神社仏閣の古きを探るの癖正かたし」とあり、遊歴する事を、大変好んでいた事が知られる。森銑三は、この紀行から陶工白鶴なる人物の経歴を明らかにされている。思うに、桑名への転封は、文政6年(1823)であり、それから5年程経過したこの頃は、近隣をしきりに、巡遊していたのであろう。

○ ふたたび笠の日記 巻269, 270所収
文政13年(1830)の春、高松松叟、高

野夢齋等と桑名から伊勢、伊賀、笠置山、吉野、浪速、京、瀬田等、近畿一円を巡遊した時の記で、2度目の旅なのでかく名付けたという。詳細。文中おかげ参りの記事が多く、この頃、盛んであった事が知れる。巻末におかげ参りの記録を付す。

○ 関のふる道 卷298所収

文化14年(1817)9月、白河から白河関跡へ到る。吉村宣猷に従い岩崎尚武、成田行明、画工泉祐と同行。吉村は家老、泉祐は定信が、企画した『集古十種』等へ収録する器物の模写に従事した人で、全国各地へ派遣されている。15丁程。この紀行名から、津村涼庵の『雪のふる道』を、前の『ふたたび笠の日記』からは、本居宣長の『菅笠日記』の名を連想させるが、多分それぞれの名を、少しもじったものであろう。

(B) 鶯宿以外の者の紀行文

当時の日本で、代表的と思われるものは、ほとんどが、収録されている。その総てを取り上げることはないので省略して、藩内とその周辺の人達のを、紹介する。

○ 信夫郡飯坂御湯治御道之記 定信著、卷411所収

寛政12年(1800)8月、定信が、飯坂温泉へ入湯した折の道の記。雅文で、さすがに格調の高いもの。水野為長が跋文を付している。25丁程

○ 旅のおほえ 吉村静軒子 卷299所収

天保2年(1831)桑名から京、大阪、兵庫、西宮等を廻るの記。前記の如く、巻末に「心付もあらば申てよと有しを写

す」と有り、詳しいが平凡。20丁程

○ 南轡記遊 二本松藩 成田(中島)確齋 卷115所収

常陸紀行。文政6年(1826)秋の識語有り、二本松から常陸国各地を巡るが、とりわけ水戸城下の記述が詳しく、小宮山楓軒宅も訪問、その書庫の状況や借り受けた図書名も記す。抄文の部分もあるが、興味ある紀行文である。茨城県郷土史に収録されている由。この著者は、定信の知遇を得ていた人で、この他に『遊芸堂次筆』なる随筆も、登載されているが、鶯宿はその様な関係からか、二本松藩の人とも、かなりの交流を持っていた様である。26丁程。

○ 信夫伊達両郡巡郷記 上下 南合義之 卷346所収

文化7年(1810)3月と9月の2回、巡郷した折の記。著者は、当時郡奉行勤役中かと思える。後に、立教館教授を勤め、鶯宿の娘の舅、晚翠、半林、の祖父である。37丁。

○ 古志の浦波 藤沢郷左エ門 卷56所収

延享3年(1746)、白河から分領越後柏崎へ、幕府巡検使の案内を勤めた折の記。9丁程。

○ 甲子山御紀行 定信 卷411所収
寛政6年(1744)、白河から甲子山へ。4丁程。

○ 千秋紀行 すわ茂親 卷44所収
元禄4年(1691)隅田川で、御船に陪従せし時の記。著者は、蘭裁老人の祖父と有り。15丁程。

(C) その他

○ 兼葭堂話 卷2所収

寛政12年(1800)は、藩祖定綱の150回忌に当り、桑名の照源寺で法要が執行され、家老大関氏に随行した鶯宿は、定信の許しを得て、終了後に、一人で、近畿地方を巡歴した。その内で、浪速の木村兼葭堂を訪ねた折の事を一文にしたものである。

この記事は、叢書中の白眉ともいふべきもので、文中に参考となる記述が多い。順に記すと、①江州に駒井の旧地がある事②洛陽に先祖の墓がある事、③定信から注目しに値する指示が、与えられている。「君上よりも、大和・和泉・河内・摂津など、道すがら古き文、その他ふるきうつはもの、杯あらハ尋見よ、又名所にまれ、旧跡にまれ、草木の実などあるハ、とりカヘリ奉れとうちうち命を下し給ひしかハ、かなたこなたは、好事の人など尋ね問けるに」、これは、古書、古文書、古器物等の探索指示である。その他に、名所旧跡で採取した草木の実を持ち帰る様というは誠に優雅である。これから判断しても、機会あるごとに、家臣達へ、この様な指示を下していた事が判る。鶯宿は、帰藩後どんな復命をしたか興味があるけれども、残念な事に本叢書には記載されていない。他の人達のものや組織立って探索した記事も見当らない。④兼葭堂の文化サロンの雰囲気がよく描写されていて、同時に来訪した人の名も、主人が心よく見せてくれた逸品も紹介されている。⑤兼葭堂へは、白河の関附近で採った紅葉を、代りに主人は、堂名の由来となった葭でゆえる筆を送る風雅のやりとり話を、披露している。⑥方7寸程の書画帖が有って、来訪した全国名家の書画、詩歌、連俳が記されており、内には主君定信の歌もあり、鶯宿も俳句を読

んで記帳した事、白河の僧白雲(定信の命で、谷文晁等と諸国を巡り、『集古十種』所収の古器物類模写に従事した人)も居合せて、彼の絵もあった事が書かれている。ここでは、鶯宿が、主人に好遇され、一流文化人並に扱われている事が、注目される。鶯宿時に35歳。木村は、65歳、2年後に没している。

○水野為長戒の歌并返歌 卷一所収
文中に「和歌の師」と有り、水野為長を、和歌の師とした事が判る。その経歴は、前述の如くであるが、温厚な人柄で定信のよき相談役でもあった。家中の人望も高く、筆者の敬愛する先輩の一人である。

○柳川川柳 卷2所収
定信の用人で、鶯宿の尊敬する人物。その人柄と共に、この人と、深畊、実父(俳号二鳴)の3人が、白河では、俳諧の3棟梁と呼ばれていた事を記している。

○季吟点懐紙 卷2所収
北村季吟の合点による俳句の巻物を、見た事を記している。

○二鳴尊霊を吊ひ奉る言葉 卷7所収

実父の死に当り、その思い出や悲しみを述べたもので、哀切極らない一文である。父の人柄、経歴をもよく伝えている。

○子供遊かはる 卷14所収
白河藩の子供達の遊びが、安永の初め(1772)鶯宿の7~8歳頃と、文化の今(文化12年頃か)では大変変って来ている事、又、藩の学問も安永の初め頃、本田東陵先生が召抱られて、家中の子供達は、多くがその門人となった(鶯宿も実兄と入門)が、四書五経を素読する者は、14、5歳でも稀であった。しかるに、天明

の頃には同年の者で、その講釈をさえ行う若者が、幾らもいる様になった。更に、寛政の初め立教館の造営ありし頃は、14、5歳で詩文をも習う様になり、文運勃興して、他邦に名を知られる人も出で来た。文化の今、12、3歳位で、鶯宿が少年の頃に、よく出来るといわれた成人達よりもすぐれている子が、幾人もいる様になったと述べている。教育水準が、知られて参考となる。なお、鶯宿は、別巻2の巻末で“兄と共に本田先生へ入門せしが、素読のみにして幼年の内に廃せし、今更遺憾なり”と歎じている。

○ 川柳居士追悼文 卷14所収

前出の人。その人格をたたえ、困碁の交りもあり、編者が、へば碁打と言われた事を記す。

○ 白川へ御所替一件 卷52、59所収

高田から白河へ所領替の記録。併せ見ると、参考になる点もあろうかと思われる。

○ 卷84、同256には、松平家の記録が色々多い。前者には、定綱の定めた掟等や遺事の記載多し。

○ 重倫幼年ニ而四書五経素読済ける時御称美頂戴之節之発句 卷109所収

重倫は、晚翠の名である。孫であり、養子とした重倫が、幼年にして主君から称美を頂戴した時の記で、鶯宿の喜びが、文中にあふれている。

○ 平義器談 卷116所収

文末に次の如き記載がある。

此書者南合義之秘藏之書也

一日借之而清水御門宿衛之日辰之半

刻ヨリ筆を建テ申刻過写シ終リヌ

于時文化十二乙亥年五月十三日

駒井乗邨 花押

書写には、この様な公務の合間も、当

てていた事が判る。この人の蔵書からかなりの数を書写している。

○ 卷202 定信は、この巻が書かれた前後に死去したものと思われ、彼の記事が多い。

○ 御得替聞見録 卷252所収 岡本茲斐記

文政6年(1823)3月、白河から桑名へ所領替の際の見聞録で、新旧藩の評判を記したもの。松平家の自漫話が多い。

○ 卷230前後は、群書類従からの写しが多い。

○ 蒙斎先生より送れる詩和歌を以和せし事 卷252所収

白河では、広瀬蒙斎(立教館教授)と駒井家の屋敷は隣合せで、広瀬は杉等を駒井は桜・梅・桃等を互いに境に植えて、觀賞し合ったと有る。

○ 卷293、定信の和歌が多い。

○ 奥州南部相馬大作御仕置一件 卷295所収

この巻には、他に常足常陸に遊び以下が、鶯宿の自記で、古い友の思い出話、和歌、俳句等あり、妻についても、先立たれた際に詠んだ、悲しみの句や歌を記している。

○ 諸国風俗問状 卷298所収

屋代弘賢から田内月堂にあてた、白河年中行事の調査依頼は、鶯宿が、担当する事となり、所の古老達の協力を得て作成した。月堂の指命は、鶯宿がこの方面への知識や興味も、かなり持っていた事を示す。

○ 卷332、333、389、390、411、定信の教訓書、著作物多し、

○ 大名形気 卷348所収

定信の戯作で、幕閣時代は、それを厳しく取締った人が、自身では、著す事が

あったという問題作で、森銑三が、往時帝國図書館にしか、所在を聞かないと言われたものであるが、現在では、『国書総目録』に依ると、国内で数本が確認される。当館には、この叢書中にも存するのである。

○ 卷362には、「定信公御集」の外、「日本外史御序文并頼山陽呈書」がある。『日本外史』は、定信の認める所となって以来、世に知られるに至ったのであり、山陽は、この事に深い恩義を感じていた様である。

○ 卷364にねずみ小僧の記録がある。文末に「予が初勤番在府は、天明5年で、因幡小僧が、引かれしを見る」と有る。鶯宿20歳頃。

○ 柏崎御陣屋狼藉者乱入一件 卷503 所収

越後に、松平家の分領があった。天保8年(1825)以前の当地に失政があったと思われ、在住した国学者生田万が、大阪の大塩平八郎の挙兵に応じて、窮民等と柏崎陣屋を襲撃したが、敗死して終わった事件の記録である。

○ 大塩平八郎一件記録

大塩事件の記録が、卷495、496、502、526、に収録されているが、卷526の「浪華秘録蘆葦叢談」は、『国書総目録』には、この叢書の外に所在を記載していない。

○ よしの冊子 卷453~458、466~468、481~489所収

昭和6年頃(1931)、森銑三が、この叢書を調査された際にこの『よしの冊子』を見出され、同7年雑誌『本道楽』3巻5・6号、14巻1・2号に『よしの草子抄』1~4を發表された。更に下って、昭和55年11月から翌年1月にかけて『隨筆百花苑』8・9巻(中央公論社)へ、安藤菊二

等が翻刻・解説して紹介された。従って、これを利用されれば、便利と思うが、とにかくこれは、叢書中の随一というよりも寛政改革期の政治、経済、社会、文化を知る上での、一級史料といえるのではないかと思う。

定信が、老中筆頭勤役中、田安家以来の側近水野為長(この人は前記の如く鶯宿には和歌の師でもある)が、府内はもとより、全国津々浦々までの風聞を集め浄書して、定信へ呈じたものである。定信の役後、同じ側近田内月堂が、遺された文箱の一つから発見し、自ら抄写、それを更に鶯宿が託されて、この叢書へ収録したのである。

文中の一段落毎に「……のよし」と有るところから月堂が、「よしの冊子」と名付けたのである。

定信は、多くの隠密を使って、情報収集を行ったといわれているが、これは、その証拠の一つとなる記録である。内容の大半は、当時の幕府や大名家等の人物評判聞書で、情報への信頼度の問題は、残るとしても、ある特定人物が、どんな批評を受けていたかを知る有力な史料でもある。叢書中の18巻を占める膨大な記録で、名のある人物はもとより、下士の人達も対象とされていて、こんな些細な事も報告されていたかと思うと、戦慄を覚える程である。定信退任頃の、彼自身への批判も載っている。とにかく、この史料は、大変興味を引かれるものを持ち、一読の価値がある。なお、叢書では「よしの双子」、「よしの冊子」、「吉野冊子」とそれぞれに、異なる書名が付されている。卷453巻頭に、田内月堂の文政13年(1830)閏3月付の序文があり、大凡はこれで知れる。為長の文で、200冊計もあ

ったとあり（実際は169冊）、それから月堂が抄写した事が知れる。巻489の終りに、鶯宿の筆で「天保七申十一月廿三日うつし晝ぬ」とある。月堂は、「藩外の人へ猥りに見せぬ様に」いい、鶯宿は「猥りに他へもらす不可」と記して、両者の違いを見せる。

○ 晩翠の写しと思えるものが、巻504～506の「芝蘭齋先生遺稿」、巻515「学校被仰出要枢」等であり、後者には「晩翠／艸堂」の印がある。

○ 巻516の巻末に「義朝公御最期之絵解」他の版本がある。

○ 巻523, 524に他筆が多く、半林の筆かとも思える。

○ 巻525の「秋月亭稿 二」は、小沢長庵の遺稿と有、直筆と思われる。

○ 巻552「ともえ考」は、田井元陳の草稿とある。

○ 前にも記した如く、中央ではあまり名を知られていない藩士等の著書が、この内になんか取録されている。例えば、南合義之、号を蘭室といった人（晩翠等の祖父で立教館教授）は『国書総目録』

では、この叢書にのみある様に、記載されている。藩主、藩士、領民や周辺の人達の著書が、所在不明の時は、念の為この叢書に収録されていないかを、調査されるとよいと思う。

終りにこの叢書の調査を思い立ったのは、「はじめに」に記した事情の外、当館に白河本『東寺百合文書』があり、その書写事情が、記されていないかを、調べたく思ったからである。並行して、細目も、面白い記事も取ろうという欲張った作業をした為に、本稿は、どっちつかずの中途半端なものになってしまった。もっと、松平家や桑名、白河両地域の事を調べてから作業に当るべきであったと、反省しきりである。定信は、誠にすばらしい文化事業を行っているが、その裏話を何故に、鶯宿は、書き留めておかなかったのであろうかと、残念な気持ちでいっぱいである。

末筆で失礼ながら、御教示を頂きました。桑名市博物館の皆様には、御礼申上ます。

第II部 鶯宿雑記事項名 (五十音順) 索引

凡 例

本索引は、鶯宿雑記の項目個々を、現代かなづかいによって、五十音順に排列した。読み方の不詳なものは、音読を原則とした。『国書総目録』に掲載されているものは、その読み方によった。漢字は、原則として当用漢字を使用した。書名初めの御の字は、前後の関連から、お、おん、ぎょ、ご、み、のいずれかに読んだが、適当でない読みもあろうかと思うので別の読みを参照下さい。数字は収録巻数を示す。別は別巻を示す。

あ			
会津侯歌	9	浅野内匠頭様御家来御願一件記録	447
会津侯浦賀御回御免被仰渡書	295	浅姫君様越前家御入興前諸家献上順	83
会津四家合考抄記	280~281	浅間焼夷記	344
会津八幡続年日記	303	浅間山災異記	474
会津八幡長帳年日記	302	あざみの花	2
会津藩赤羽仁兵衛歌	251	足利家歴代之次第	44
会津遊行の覚書	5	足軽通ひ	84
葵鐔考	別12	声名家記	185
青山氏室辞世	11	阿州将裔記	196
赤蝦夷風説考	517	飛鳥川物語	40
赤穂秋田面	40	東鑑撰者未詳	4
赤須賀獵師町円六并妹ぬい孝行		東鑑要目類聚考	405, 406
御称美	295	東路のつと	235
赤堀之竹旗竿	84	あつまの道の記	234
赤松記	192	吾妻問答	241
赤松再興記	192	阿蘇右衛門	1
秋尾徳左衛門	9	阿蘇山焼御届	22
秋田塩の井	12	足立忠治右衛門之碑	508
秋月亭稿	525	安多武久路	282~283
秋山記	145	跡しら波	140
芥川敵討	56	姉ヶ崎村次郎右衛門召仕市左衛門	4
浅草観音開帳	56	阿武隈川享和三亥六月洪水	256
朝倉十七ヶ条	14	阿武隈川水源	10
朝倉敏景十七箇条	198	安倍山略縁起	347
阿佐太子像	83	天草騒動一件之事	564
あさち	439	天忍穂耳尊	7
浅野家臣報仇一件聞合	9	蚕の焼藻の記	551
		天野屋利兵衛伝	516
		海人藻芥	224

雨夜物語	325
雨夜物語抄記	48
菖蒲前像	7
荒川家略系図	84
荒木略記	194
新瀬手簡	386~387
荒山合戦記	191
有馬山温泉記	34
有馬豊氏卒去に付御内室の歌	56
或人之家之留記	493
安永御社参一件	525
安国殿御縁起	516
安斎叢書抄	492
安藤為実日次記	131
安徳天皇陵伝	182
安竜院	84

い

井伊軍記	179
飯綱之法	別22
井伊直孝君榊原侯へ御物語他数条	498
家隆卿三十首歌	14
家忠日記増補追加	271~279
家綱公御誕生之節献上	84
家長日記	178
家久公芝舟の歌并仙台吉村朝臣の歌	7
家光公薨御一件	56
家慶公將軍宣下大御所様御本丸 と西丸御移替一件	499
いほぬし	228
伊香保記	2
いか物喰	48
池上意三	14
石川五右衛門(付浜島庄兵衛)	1
衣装くらへ	11
石川丈山七ヶ条	28
石川丈山之消息	28
石取神事	84
いしなとり	57
石森孝女伝	448
伊豆大島焼	28
伊豆勝覽	447
伊豆国伯島方沖合へ異国船漂流に 付房州へ公儀御役人被参候一件	293
和泉崎村銀藏	25

伊勢御湯釜銘文	28
伊勢紀行	231
伊勢津其夕ふみ	1
伊勢国彦志郡榊原温泉来由(版本)	516
伊勢国風土記	224
磯五郎喧嘩	31
潮来	137
一雲寺額	214
一伝流長刀	256
一万度百万遍の論	7
一柳か名所に遊ぶを送るの序	109
一角纂考(抄)	28
一休和尚維摩居士讚	294
一休蟠川の歌	38
一休の真蹟	39
乙巳紀聞	567
聿修編	443
乙未紀聞	448, 450~452
伊東主膳御改易一件	295
伊東悠哉文	14
伊奈家御達	80
犬追物之御文	390
犬かみあひ	15
井上因碩呈書	別37
井上素計八十之賀	109
異聞録	24
異聞録抄出	25
今川大双紙	197
今川了俊落書	295
いましめ草	別1
今物語	215
石清水臨時祭之記	109
岩手山の穴	57
岩間勘左衛門	22
岩屋観音縁起	28
陰処病氣自療法	564
陰徳太平記抄記	53
陰徳陽報	22
陰秘録	別12

う

植木うへやうの伝	199
植崎九八郎上書	418
上杉家大阪御陣之留	別5
上野十郎朝村	2

上野役者書付	15
烏涯遺稿	442
伺公帳	565
うけら集	38
宇佐問答	264
牛込神楽坂復讐	347
牛裂	別22
謡の歌	4
うたたねの記	231
転寝森	14
雅楽頭北方阿武隈川身投事	別22
歌袋	1
内田正信追腹	9
宇都宮大明神代々奇瑞之事	239
宇津山記	209
雨尾山飛鳥寺之縁起	320
梅君古蹟	80
梅谷家由緒書	338
梅子	1
梅若涙雨	14
浦島か箱	418
雲溪先生詩集	524
雲州の歌并ノ桓の歌	28
雲陽志抄記	218
雲林院	15

え

永三郎君墓碑銘	508
永代橋落	14
栄葉集御贈答	13
永楽銭	51
荏柄天神縁起	239
易然集の歌	7
益友損友	2
エケレス舟渡来に付肥前侯御遍塞	11
ゑさし物語	413
蝦夷問答	137
越後頸城郡柿崎大清水村にて如意輪観音 を掘出せし時榛葉久豊よりの消息	109
越後在番中巡村の道の記	251
越後名寄抄記	284~287
越後国古志浦野積村海雲山岩坂 弘智法印伝記	109
越後国大地震一件并九州筋大荒	199
越後国新潟湊百姓騒動之次第	295

越後屋店開	11
越中守殿浦々御旅行之節久世丹後 守へ被下ける一帖	516
越中国立山焼之事	498
越風白挽歌	7
江戸駿府大阪御殿天守覚	343
江戸にて大洲侯御中邸にて式的 御興行	525
江戸本町某の女六歳にてみつから 作りてうたひし歌	109
垣衣考	22
烟花城書画展覧の目錄	138
円光大師伝	31
艶詞	208
遠州掛川城天守棟札	213
遠州直伝御家流之心得	333
遠州流茶湯大意	333
延徳御八講記	201
円妙寺にて后月見の文	109
遠慮伺御定	80

お

御預人一件	514
おあん物語	3
御家柄糸	28
老のをしへ	434
老のくりこと	241
老のすさみ	241
桜陰腐談抄録	364
桜雲記	別10
応永ヨリ慶長迄関東合戦次第	139
扇稻荷御神社之縁起	11
扇稻荷并妙見八天狗	84
王義之	2
多き窓の螢	130
押字考	501
奥州白川城主之次第	5
奥州南部相馬大作御仕置一件	295
近江国輿地志略抄録	527~530
嚶鳴館遺草	462
鸚鵡の言葉	337
大石良雄書簡	2
大内問答(抄)	198
大内義隆記	193
大岡越前守様御伺	523

大岡忠相(付池上門番・笹屋金紛 失・萱代・西瓜代)……………14	御靈屋御靈前之差別……………15
大草相伝聞書抄録……………372	小田原大火御届……………39
大御所家斎公薨御始終之一件……………別6	小田原侯歌……………51
大御所家斎公御実記新見伊賀守正 略之記……………499	落合左平次背旗凶説……………438
大坂川筋金堀出……………56	落穂集事跡考(抄)……………26~28
大阪御陣御供拾七騎 并歩兵(付御組三十騎)……………84	落穂集附録……………48
大阪天守雷火……………80	御手伝御尋……………84
大阪夏御陣鬪戦之凶并跋……………508	御得替聞見録……………252
大阪与力大塩平八郎叛逆騒動 一件……………495~496	乙五郎様銀之助様御養子ニ付被仰渡……………83
大さしもの指へからす……………4	威毛之伝……………6
大塩乱妨一件補遺分……………502	鬼式部……………418
奥州後三年記……………237	鬼丸太刀……………9
大関氏の通字……………14	小野次郎右衛門……………13
太田道灌……………101	小野寺氏伝……………517
大友記……………195	小野於通ノ色紙……………138
大殿様御年賀御祝ニ付八丁堀江 被為入候節御飭付并御献立……………327	小野道風……………7
大野武範東西問答……………245	小野道風像……………83
大村侯公家衆御馳走御断……………567	小浜侯御掟……………51
大村古物堀出……………1	尾見正数聞書……………24
御駕籠竜御拝領……………84	御宮御祭祀記……………327
御徒伊藤氏消息……………別26	御役中御帳付心得之覚……………565
御徒頭……………84	おらくの御方之御里方他二ヶ条……………57
御徒衆の妻女離縁ニ付ての歌……………2	阿蘭陀人被仰渡之御定目……………516
岡正安伝……………28	折々の御文章御歌……………390
岡本華亭先支配所往来之節詩歌……………別9	折たく柴……………548~550
小川弥五右衛門雑記……………462	御留守屋番……………84
御勘定山田寿之助水戸家外岡竜三郎 喧嘩一件其外雑事種々筆記……………364	おろし足の次第……………198
萩画卷物序……………413	尾張小荷駄……………9
翁物語……………518~521	尾張国熱田太神宮縁起……………239
奥御儒者成島邦之丞司直上書……………別26	御話初肩衣……………9
奥のみちくさ……………18	温恭院様御葬式一件……………別35
小栗判官……………16	御指物金御幣之凶并御家昔今のもの かたりなり……………256
小栗栖の栗……………16	御柔道心得……………337
桶峽之碑……………138	御大小拵……………22
桶屋のうた……………34	女非人辞世……………2
小河内殷春追悼のふみ……………109	御職竿……………1
忍塩井……………11	御菩提所……………15
御鷹籠中に卵を生む……………111	陰陽師家業(付舞太夫職・梓女職 ・恵比須願人職)……………13
小田川雷獣……………4	
	か
	槐記……………561~563
	廻国雑記……………233
	回船安乗録雑抄……………560

蓋徹問答	130	仮名性理	6
楓をもみちと云事	6	仮名世説	117
花園会約	542	仮名早悟集	382
加賀家入梅考	9	加名生谷堀又太郎鎗	137
杜若の発句	7	金田銀大夫	7
柿本氏系図	223	狩野永徳	101
柿本人丸事跡考	145	狩野元信	101
楽考	別14	甲の檜垣	60
楽則	213	釜煎	別22
獲虎実録	4	鎌倉遠乗	80
学者必読妙々奇談	244	かまつかの花	1
鹿足之次第	198	鎌田某の歌	56
家系附録序説	別13	鎌足公像	83
花月双紙	365~366	上方筋洪水	15
鹿島治乱記	187	上ノ山侯和歌	11
加持鳴弦	11	雷の撥考	11
禁過酒辞	4	神代の遺風鄙にありという事	9
柏崎御陣屋狼藉者乱入一件	503	龜子を産	80
春日社家太吉万驗帳	137	蒲生氏郷記	185
春日社本談義屋源義経公御鎧之覚	516	蒲生氏郷紀行	234, 498
春日神事御人割	84	蒲生氏郷書簡	137
春日局像	508	賀茂の葵	15
春日山日記後集(抄)	352~354	鴨長明海道之記	別37
霞の友	345	鴨長明集	334
片岡高房書簡	2	萱野三平忠孝記	542
片岡長守消息	11	萱野三平伝	542
堅田侯蝦夷御巡見一件其外彼地 騒動の条々	8	雅遊漫録抄記	172
堅田侯長歌	57	辛崎の松	8
堅田侯正敦朝臣堀田摂津守義親別 序信の和歌	109	烏丸三条狂歌	34
略血歌	437	烏丸資慶卿三十三回忌追善歌	53
学校被仰出要枢抜抄	515	烏丸内府御口義	31
葛飾古鏡銘	28	烏丸光荣卿御消息	4
甲子山御紀行	411	烏丸光荣卿中山道御紀行	8
克修録附言	別35	唐津納高	53
甲冑古伝	1	唐銅や妻の歌	9
勝山古記	171	伽藍古実	15
桂姫	9	過料金	14
加藤清正従朝鮮前田利家ニ送ル書	295	枯尾花	294
加藤清正壁書	別22	川内秋興御文	390
加藤瀬左衛門覚書	326	川越夜軍	51
謁加藤肥州廟二首	364	川崎氏覚書之書拔	46
歌道秘蔵録	25	河中島五戦記	407
門谷清次郎薩隅見聞ノ覚書	463	川村瑞軒	9
		寛永御手伝	84
		寛永中御家中御配当并人数御改	84

寛永録抄録	542
艱厥篇	503
漢語大和故事拔萃	56
勸修寺縁起	201
菅相渡唐図	137
寛政三辛亥春新宮御成就御製之詩 栗山先生之記	213
寛政十一年聖堂御再建一件	516
寛政二年庚戌六月七日寛光院様 御逝去烏丸光祖御追悼	116
菅像弁	501
菅像弁略抄	83
官鼠の文音	57
元祖吉村又右衛門宣充遺言之書	24
神田白竜子雑話筆記抜書	330
感忠碑御歌	293
閑田耕筆抄上	17
閑田耕筆抄	21
閑田次筆抄記上下	118~119
関東洪水の消息	15
堪忍箱	別26
冠武甲写	83
寛文遺墨物語	560
寛文之豊年	56
閑門興廃考	137

き

其阿上人消息	53
紀伊治貞卿の御歌	15
帰家日記	460
耆旧得聞	187
季吟点懐紙	2
菊地軍談抄記	50
機嫌の心得かたきもの三つ	11
木崎原合戦記	200
義残後覚	71~72
忌日之礼	137
紀州御館へ被為入候節の御ふみ	390
奇石部息栖瓶	22
木曾宣公旧里碑	137
北野聖廟	11
北見若狭守様御預一件	339
北村季文	80
橘窓自語	102~103
狐の小歌	56

儀同三司准大臣事	別13
偽年号考	320
棋賦	4
季文梅百首	292
紀三井寺縁起	28
吉士長丹像	83
木村氏奉加帳抄記	50
胆保か不孝	22
逆徒大坂方首帳	別26
笈埃隨筆	463
杞憂迂譚	別21
救餓大意	517
九州のみちの記	234
旧事夜話	357
旧説拾遺抄記	49
九陌火災委録	42
求竜説	411
仰景録	19
鏡公遺事	378
京極家御潰一件	9
京極宮変事	11
翹楚篇	250
京大仏雷火	9
京都炎上記	474
京都洪水之状	9
崎陽筆語	139
享保六年九月京祇園茶店女棍か歌	130
杏林内省録卷一の抄録	別2
杏林内省論抄論	508
教令	57
玉考	別13
玉碌随毛(抄)	465
玉露叢抄記	356
馭戎慨言	560
蓬伯玉	2
举白集歌之部	別38~39
清正の像	51
切死丹	別22
霧島嶽記	138
桐屋藤八	7
禁腋秘抄	203
近集秘要録抄記	491
近世世事談抄記	別22
銀台遺事	432~433
禁中怪異	83

銀の花活	3
金捧堀出	11
禁裡洞中賜大樹六十賀和歌	364
金竜桜御遊覧	111

く

空観加持	56
空摩追悼	14
空也上人	34
千斤紋之説	137
匂兄弟	395
草だんこの歌	5
愚雑俎	395
草鼈甲	6
くすしの心さし	1
九十九夜	6
孔雀御陣羽織	13
久世条教	372
久世広之御家訓	560
具足餅儀	137
クナシリ鳴騒擾一件	517
熊田何某祝句	57
熊沢先生源氏物語之説	388
雲井御茶壺	84
愚問賢注奥書	7
愚問集	8
栗山利安覚書	109
黒沢丹下	14
黒田雲州ふみ	28
黒田家臣翰譜	183
桑名聞書	560
桑名御旧領之節宝永元年と七年	
迄記録の写	508
桑名故教授蒙齋広瀬先生墓表	382
桑名御城下路程	263
桑名南北大手御門御出来	84
桑名城鐘銘	11
桑名諸寺院由緒并京其外御由	
緒之者共	84
桑名通し馬	84
桑名百姓騷動之大概	137
桑名名勝志	146~149
桑名要枢	84
桑名渡看板	28
軍陣聞書	200

軍神問答	30
訓蒙駢言	382
薰沐拜書	15

け

慶安元大猷院様日光御社参に付	
定綱公供奉御行列書	13
執苑日涉抄記	57
経済随筆	503
芸州広島の足輕手柄の事	382
慶長自記	508
稽徳編抄録	444~446
芸藩川崎氏筆記	別5
継筆故事	139
結笠帯	6
月忌説	別21
決獄考	別13
見外白うるり抄	34
蒹葭堂話	2
猷可録	204~205
檢校借金御仕置	38
鉗狂人	373
猷芹録	別35
賢剛院本多公墓碑	542
兼好法師伝考	343
言志集	335
源氏巻の心をもてよめる歌	436
源氏物語新釈総考	388
源性算術	2
謙信軍配図	56
謙信の歌	57
元政か庵の記	11
建長二年九月十三夜当座歌合	334
建仁元年八月十五夜五十番歌合	343
見物村大亀	25
見聞諸家紋	200
源平盛衰記抄義経始終略記	130
憲法捷覧	435
鈴林卮言	564
元禄御預人記	476
元禄十四年巳十月撰州鳴上郡	
御巡見之記	125
元禄曾我	80
元禄二定重公日光御名代御行列	13
元禄四年玉丁御覧	28

小池源左衛門……………57
 故院様古昔被爲復天皇号候御式書…別6
 耕雲筆記……………28
 弘化乙巳漂流人一件……………567
 弘化改元勅宣……………567
 光火部火辨……………22
 公儀御代々御花押御朱印御黒印写…336
 考機解……………338
 孝恭院様御遺物……………1
 香桂子……………13
 校合雑記……………144
 孝行手鞠歌……………564
 好古小録……………23
 恒斎雑記……………160
 高山遺事……………477
 孝子善之丞……………6
 孝子初五郎……………214
 洪若臯乱僊記……………138
 甲州の禪尼……………14
 甲辰紀聞……………566
 上野国群馬郡蓑輪軍記……………171
 交替式……………363
 皇朝学者妙々奇談後言……………381
 後凋録抄出栗山先生近衛殿下へ奉
 りしふみ……………別9
 光徳山円妙寺祖師日蓮真蹟之漫茶
 羅之伝来……………109
 後度百番自歌合……………431
 行囊抄之内甲斐下野信濃尾張等の内
 六ヶ条抜抄……………別31
 行囊抄之東西須磨西須磨三段ノ内抄
 録等……………別32
 公武大鉢略記……………224
 好物論……………2
 光明管見解……………338
 高野参詣日記……………234
 高野非事吏……………15
 高野聖室町殿日記……………38
 高力喜兵衛……………2
 幸若舞考……………137
 子を愛するの歌……………11
 御家中預米……………84
 小金井紀行……………116

小金原御鹿狩……………6
 小草籠、続小草籠……………別31
 御教訓書……………332
 御教訓之書……………411
 故郷物語……………177
 古記録抄記……………52
 古記録抜書……………383
 古今集箱伝授紛失……………109
 国号考……………501
 国司国造考……………501
 告志篇……………438
 国朝旧章録……………別24~25
 小倉騒動一件……………14
 御軍役御定等其外御備向御軍器且
 役持合御定……………84
 御承譜……………409
 後光厳院御製……………34
 志をたつるのふみ……………202
 こころの華……………140
 古今茶道全書抄記……………44
 古今著聞集抄記……………315~319
 古今武鑑書抜……………145
 胡塞記……………31
 御在所交代場所……………80
 後嵯峨院宸筆御八講之記……………201
 古史逸……………515
 腰掛松……………1
 御示敬……………1
 故事童蒙抄(付俳文)……………349~351
 古志の浦波……………56
 越部禪尼……………38
 越部禪尼消息……………184
 小島の口すさみ……………228
 小十人山口小八郎御預具足焼失……………3
 五十之御賀之御文章……………389
 五十四郡考弁誤……………391
 五升庵蝶夢文集……………175~176
 古松軒校訂……………517
 御消息一通……………198
 五常の余……………56
 御上洛古御道具御焼失……………84
 御陣鐘銘……………84
 御前様より吉村嘉内へ被下し御歌…213
 御代替御神文前書并御持参針……………84
 御大任中世上之咄……………434

国家金銀譜	523
骨董集抄記	54
湖亭渉筆抄記	304
御転任	10
小土器の味噌	51
後藤御仕置	15
御鳥羽帝遠嶋百首	292
子供遊かはる	14
御奈良院御撰何曾	224
近衛様御消息	3
五ノ字指物	57
木葉衣	523
御花園院御消息	184
鼓腹盛事	546
枯木集抄記	48
小堀遠州道之記	387
小堀宗甫君書捨之文	31
小町の讃	10
小町の碑	14
小松軍記	238
小松内府重盛	1
駒野石取場	84
小宮山内膳	1
御夢想之連歌	53
小森彝倫消息	256
御用金	1
五倫五常名義	382
御歴代君公御自筆之詩歌	213
御歴代様御花押	256
権現様台徳院様之御台様へ被進候 御文写し	113
権現様二百回御忌	57
金剛山壁書	5
魂祭貧女の歌	38
紺珠	16
昆陽漫録抄記	別9
婚礼始終略記之次第	382

さ

斎諧俗談抄記	40
西行の歌ニ涙	2
西行物語	463
采芝園漫筆	472~473, 474
在東記聞	517
斎藤小兵衛由緒書	338

才葉抄	224
呈酒井拾遺定綱公御訴状写	338
榊ハ神樹	2
榊原式部大輔消息	別37
榊原高尾	80
榊原忠次侯御記録抄記	84
榊原飛驒守	2
坂上田村麿	3
坂本村実右衛門	22
桜の句	15
さくら山田植御遊覧	293
鮭楚割	38
佐々木清十郎敵討	34
佐々木高綱旗文	9
ささこおちのさうし	182
流石の文字	3
定和公溜御詰格被爲蒙仰候ニ付御同 席様御招詰御式書	436
定和公溜詰格被爲蒙仰并上野御手伝	411
定勝公御家督御尋	84
定邦公御歌	434
定邦公御賀之節和歌寄鶴祝	31
佐竹侯の御家臣梅津半右衛門之俳諧 師其角よりの消息	109
定重公御定	84
定重公御纏御役差物等鎗印	84
定重公追鳥狩之巻	7
定綱公大阪御出陣のあらまし其外山 本七太夫覚書并御家之昔語等記し 置	256
定綱公大阪御陣之節御軍用備器之覚	84
定綱公御組大阪御帰後御加増	338
定綱公御号	434
定綱公御備定并御条目	84
定綱公御軍法御秘抄	497
定綱公定重公御代分限帳	340
定綱公其後御定	84
定綱公日光供奉御行列	84
定綱公御代御掟御条目	84
貞任の連歌	34
定永公日光御名代御行列	327
定永様定栄様御元服之式御着甲始御 式并御家督後諸事留	110
定信公一位様御辞世	34
定信公被仰出留	332

定信公御筆記	202
定信公御作漢文帝除肉刑論	1
定信公御文高祖論	7
定信公御文勿辭樓記	327
定信公九思の御歌	4
定信公御集	362
定信公御軍器御定并舞台格以下指物	
羽織之御定	84
定信公御拝領	22
定信公月次御和歌御会の序	34
定信公次信忠信二士の碑懐旧の御歌	
ならびに佐藤庄司古城蹟	3
定信公兵学書見心得	332
定信公和歌御会之節作文之写	335
貞秀朝臣集	292
貞姫様御詠歌	213
定良公譜	84
定良公悼光圀卿之詩	137
五月雨句	9
雑考	329
雑々拾遺抄記	58
薩州栄翁様八十八御年賀ニ付上々様	
より被進候御詠歌	327
薩州鹿兒島盆踊	109
雑抄	別88
雑談集抄記	138
薩摩侯御隠居栄翁君へ被任従三位事	295
薩摩風俗聞書	564
佐渡風土記	342
佐那田か郎等文三	14
讃岐	38
実岳卿歌	4
佐野宗綱死	57
三味線の讃	11
左右銘	10
小夜のねさめ	210
さらしな日記	229
三愛記	209
参議公弁	501
三月五辛	1
三社託宣考	30
三社詣	11
三州安楽寺	84
三州桑子妙源寺 <small>の</small> 勸化巡行之書	109
讃州侯大上使行列	42

参州二川紀行	56
山水の讃	14
三世雪中庵蓼太終焉記	392
三人法師物語	465
三王外記・続三王外記	106
三夢	11
山間伊答	265~266
山門無量院書写	567
傘笠考中略抄	329

し

寺院棟間定	80
塩尻抄記	126~129, 132~133, 135, 141~142, 150~157
枝折の歌	214
慈恩寺宝物	137
四季金屏風	31
式日御帳	84
嶋立沢記	567
自休蔵主	80
自教録	434
四君子	9
紫家七論附系図	388
重矩松鳴の歌	34
重倫幼年ニ而四書五経素読済ける時	
御称美頂戴之節之発句	109
慈元抄	215
支考終焉記	12
芝山が俳話	40
紫芝園独語抄	560
獅子巖涌蓮上人吉野道の記	138
賜私号記	3
四十二の物あらそひ	392
慈照院様御賀の歌	9
四書の文字数	13
賤か枝折	7
志津ヶ嶽七本鎗	5
下谷集	443
治地略考	別3
十界図考	別12
志道軒辞世	56
品川沖鯨	25
信夫郡飯坂御湯治御道之記付跋	411
信夫伊達両郡巡郷記	346
芝御宮御記録拔書	336

柴木村甚助	3	守国公御制作九日百首	389
芝山内騷動御仕置一件并京都寺地 御仕置	251	守国公御判歌合	389
柴田退治記	237	主上崩御一件	42
柴野家世紀聞	別15	十竹斎筆記抄録	131
芝蘭斎先生遺稿	504~506	十種御歌合	368
渋柿	209	十徳の事	137
斯文源流	5	出法師落書	198
嶋原御使	84	酒顛童子狂歌	78
嶋原寄手右衛門佐口上之覚	5	聚楽第行幸記	179
示蒙抄	86	殉死禁	56
下野浅間山穴	413	春昭大夫人碑銘	392
下野国安蘇郡春日岡山転法輪院総宗 官寺重興東照神廟碑銘	392	舜水朱氏談綺抄記	203
射手方文字	198	俊成卿九十賀之記	109
射礼私記	198	春湊浪語	300
周易序卦断法附録	524	春台先生赤穂四十六士論	別26
集書	32~33	俊徳院様八木某に賜ふ御賀章	327
周南先生爲学初問抄出	39	紹巴富士見道記	235
十二山海之和歌	362	常庵の詩	57
十八檀林	88	承応より元禄まで御沙汰書抄出	79
十八番歌合	368	正学指掌	524
秋風抄	182	松花堂ふみ	別21
十楽庵記	209	松窩日録抄記	449
酒海	2	松窩六七帖(抄)	別5
准后准三宮之事	別13	松窩天保十一庚子六七帖抄録	別8
殊号事略	268	消閑雑記	160
殊号事略後篇朝鮮聘使後議之事	268	鐘馗	1
守国院様御いたみの上々様御悼御歌	202	松久院様御遺物被進候覚	202
守国院様御鏡裏の御詠外二首	327	承久軍物語	186
守国院様御部屋住之節南合義 之二賜フ処之御文書	327	性空上人伝	242
守国院様御部屋住之節日光就御社 参若殿様白河御発駕御行列	327	性空の影	34
守国院様重キ御拝領物等三四ヶ条	256	将軍宣下御老中御招請一件	339
守国院様御七十御賀儀同様御発句	213	照源寺観桜記	263
守国院様興中皆白雪之御歌二十首	293	正広日記	232
守国院様御詠草有之芝山持豊卿 御消息	327	丈山先生碑文和解	111
守国院様御葬式御行列	202	正三の語	9
守国院様御病床中之御歌	293	天明五尚歯会	15
守国院様白川名所碑之御歌	293	尚歯会御文	390
守国院様より定永の君へ書贈らせ 給ひし御文	213	少将様御隠居御差留之節御歌	11
守国公御作楽説	389	少将様御大任之節評判	11
		瀟湘八景并宋迪玉石間ノ憶説	137
		小女松雪の歌	14
		精進魚類物語	223
		涉成園十三境御歌	213
		城製月下集	237
		小窓偶筆	337

小窓筆記抄出	48
樵談治要	210
常德院殿様御乗馬初らるる事	198
肖柏	101
勝負談	343
昌平学命令簿	145
正平革	4
浄和隨筆抄録	516
しょく	2
蜀山人百首狂歌	80
曙夕御自歌合	434
諸家出世の作法	15
諸家留守居役始	42
諸国御関所手形	15
諸国洪水	25
諸国御下知状	15
諸国風俗問状	298
女子訓	369~371
所司代天盃頂戴	56
諸州採葉記抄録	112
所々七本鎗	80
初度百番自歌合	431
次郎様真田伊豆守様江御養子御引 越し節御道具御行列	327
次郎様真田弾正大弼様へ御引越後 始而被爲入候節御飭付	327
白川猪俣	564
白川鹿鳴太神宮縁起	137
白川公御役中御心得之書	382
白河侯御言行聞書	568
白川古鐘銘	251
白川古伝記	57
白河関鬼門	34
白川へ御所替一件	52, 59
白峯寺縁起	201
壬寅紀聞	522, 別34
新加納奇童	11
心観院様御辞世	28, 57
宸翰勅筆誤	53
神功皇后御甲之凶	83
神君阿古屋渡御	137
神君三州大樹寺仏像前奉納御書	109
深耕の誅	22
壬午記	460
新猿樂記	184

新室叢書	474
信州佐久郡内山村亀松	292
信州諏訪社	12
信州三塚村七左衛門母長寿	80
壬戌后遊録御序	別36
清人曲子	138
信長記抄記	46
新田開発の御歌	別1
新筈問答	359~360
神風行囊抄	512~513
新編俳諧文集	376
人名の考	別13
新役竜の庖丁	40
新蘆面命抄録	別21

す

翠園雜記抄記	311, 426
水月子臘梅歌	214
水月文藻	420~423
水斎日鈔抄記	367
随心院追悼の文	28
垂統記事	300
随兵之次第事	385
睡余操筆	107
末森記	191
須賀川駅にて一橋様御領分野州道場 宿之者敵討	256
菅谷寺略縁起	28
菅原系譜	別35
杉直物語	385
杉原彦左衛門物語覚書之条々	17
杉本茂十郎御咎	263
菅笠日記	55
角田川花見のふみ	251
隅田川木母寺略縁記(版本)	516
隅田川和歌(版本)	516
すみにこる	7
住吉詣	230
すみれの説	137
相撲隠雲解	80
駿河殿御藩分限序	別22
駿河土産	73
諏訪蘭哉覚書抄記	292

せ

聖教類語412
 西山様と若殿様江被伝進候御伝
 言之扣武徳大成記発端別30
 勢州鈴鹿山麓孝子万吉伝22
 清女の塚48
 勢桑見聞略志98~99
 聖像考別13
 聖代秘録392
 清風亭御文8
 正名考337
 勢陽雜記拾遺追加別16
 精里古賀先生墓表413
 精里先生書牘145, 別12
 瀬川妥女か妻の文53
 雪辞34
 関路の露13
 責善会別19
 昔伝拾要抄記43
 関の秋風345
 関のふる道298
 雪舟101
 雪村101
 拙堂文話320
 節婦の碑14
 世話雑話ぬきかき48
 善光寺記行232
 善光寺高欄天井勸進疏434
 扇考略抄329
 千字文4
 千秋館座右銘其外御歌213
 千秋紀行44
 泉州堺南宗寺集雲庵壁書137
 撰集抄225~227
 撰集抄ぬき書43
 仙鼠翁八十の賀109
 仙台異国船漂着25
 仙台御留守居伊藤要人書状写413
 仙台小姓喧嘩56
 仙台古銭堀出51
 仙台左近衛権中将藤原朝臣吉村侯の
 白川関明神へ奉納御詠歌109
 仙台領妖術之者214
 仙東軍伊達安房守成実覚書上37

仙洞御所修学院御幸100
 宣徳賀章1
 千年山集抄記89~90
 仙府封疆券并関閣書上30
 先邦物語88
 川柳居士追悼の文14

そ

宗因独吟百頁16
 増衍四戦記440~441
 宗祇101
 宗祇廻国記抄記53
 宗家御幼年二付脇坂家へ被仰渡之条11
 宗家へ御達51
 宗五大艸紙抄書198
 相山詞林542
 相州小田原城主大久保加賀守様
 御家来敵討御届書之写139
 相州禅門1
 総州平夷山出張中日記395
 雑兵もの語上125
 惣まくり2
 相馬日記83
 相馬の野駒2
 箒銘并序263
 索麴地藏16
 曾我流書礼法式343
 続翌檜抄記376
 続古事談222
 続古事談抄記57
 俗説弁抄記51
 続俳家奇人談417
 祖君の御組28
 十河物語196
 底本草48
 底ぬき書38
 袖日記抄出8
 鼠賦4
 徂来書簡15
 村庵七歳ノ詩57

た

大一丸神明縁起138
 大学詠歌22
 大雅堂発句263

大鏡院様光徳院様御遺物献上	84
大鏡院様御自筆にて山家筋百姓衰漸 御引立三輪権右衛門八屋矢兵衛へ 御達	別35
太閤天下田地へ竿入	別13
醜翻雑抄	203
大守様御歌	263
大嘗会御製	11
大次郎娘	14
退私録四	別27
台徳院様御歌	34
大納言利家公御遺誠	160
大年達磨讃	4
太平秘覧抄記	53
泰平年表	510~511
大木流れよる	1
大名形気	348
田井義孝	10
平忠度百首歌	334
大利村九藏	1
高市丸	6
高市麿	22
高木氏雑記	522
高倉院巖島御幸記	230
高田地震	80
高田通引方之割	202
鷹司殿隅田川御歌	138
高橋紹運	1
高藤殿	28
高山彦九郎伝	437
財部継丸	1
沢庵諫書	9
沢庵玉室流	56
沢庵禪師奉贈鎖国公詩文同尺牘	382
沢庵入洛記	542
沢庵百首	60
竹のはな	7
他家と持参候書	42
多胡碑考	137
太宰府天満宮故実	108
田坂与左衛門御家を出し一件	別35
たそかれの記	304
多々良義興比叡山雪の秀歌	343
太刀疵の名号	9
橋寺略縁起	341

立花道雪	1
橘の薫	29
伊達鑑根元集抜抄	43
伊達正宗と本多正純へ送簡牘	別32
多度寺縁起資財帳	364
田中休愚右衛門	9
田沼侯始終	25
田沼侯の話	15
種姫君御連歌 (付少年和歌くさへ)	2
田畑鼠付	80
旅のおぼえ	299
玉可都万抄記	321~323
玉造小町子壮衰書一首并序	184
爲氏竟宴歌	34
爲朝の上差	57
爲長いかに寝ての歌	109
爲長御預地御題の歌并詞書	31
爲久卿百首歌	10
爲村卿狂歌	11
樽井庄官帯刀	84
譚海	91~95
談海抄記	56
檀考	137
端午弁	28
男女の盛衰	11
檀林皇后	3

ち

親清か女歌	38
親輔消息以下予筆のすさみ種々	295
親輔月見のことば	80
親忠公二百回追悼	137
築城記	200
筑前続風土記	553~559
筑前名寄抄記	56
竹馬抄	210
竹生嶋縁起	11, 239
智相院様御逝去御追悼の歌	84
智相院様御廟	84
知足子を送る俳諧の序	214
知多日記	253
地名河川両字通用考	別13
茶山先生行状	516
茶道訓并大意	333
茶焙伝	1

茶焙伝	1
茶話指月集	214, 334
茶話真向翁	113
中国治乱記	193
中山道の御文	390
中山聘使略	396
中条殿僕さうし	11
忠臣秘話録	別28~29
中禅寺私記	201
澄憲の教化	34
長寿の人	7
長寿万平	11
朝鮮康隆年間文	1
長嘯子和歌	14
朝鮮王子怠状	364
朝鮮人の発句	214
朝鮮之海雲与清正書	516
朝鮮来聘小倉侯辰野侯対州御渡海	11
兆殿司	101
直裾	137
樽僊漫抄	31
楮幣考	418
鎮国神君御詩歌	13
珍集書	541

つ

通信考	501
津軽家老桑折駅にて自殺一件	295
築地御用自省録并広瀬台入答書添	293
月雪花御自和歌合	389
筑紫道記	232
筑波問答	240
土浦侯御家督一件	11
土御門院百首御製	12
慎花草	9
津村屋平左衛門消息	564
つらつらふみ	別21
劔大明神の鏡	7
鶴地藏	11
鶴毛衣抄記	60
徒然賦	7

て

定家卿消息	184
贈定家卿文	184

庭松篇	14
丁卯私記フロシヤ一件 (付長崎エケ レス船并下田漂流船一件)	35
丁酉紀聞	492
丁酉後風説紀聞	別18, 20
鉄杵を鍼に研	4
鉄砲問答	180
手習本意心得	501
手毬歌	83
寺坂吉右衛門状	60
天海僧正歌	34
天寛問記	478~480
天狗にいさなはれしものかたり	5
田邸にて御茶進らせ給ひし時の 御ふみ	390
田邸宮崎の御別業被爲入候節御歌	390
天保改元詔	別9
天保庚子紀聞	別6
天保十一後松窩六七帖抄出	別26
天保十一年子年イギリスニテ阿片多 葉粉製法清ノ交易一件	別26
天保十一年十二月廿日故院様御葬 送御行列	別6
天保十五甲辰阿蘭陀使節船始末	564
天保十二御条約に付御触書	別26
天保十二年辛丑諸侯方御譜代并 御旗本乗馬上覧	別26
天保八年丁酉八月十三日大風雨御 届書并一件	別35
天保二年辛卯御沙汰書抄録	448
天保四巳年凶作一件并天保五午年 江戸大火	410
天保六乙未より申の秋大飢饉話	別17
天満宮略伝	362
天民詩話	413
天明七未年糶町甚兵衛上書	515
天明二寅浅間山焼	111
天明八申年御上京御行列始御 道中一件	348
天文方高橋作左衛門御仕置一件	251

と

東海紀行	125
東海衡巔之詩	214
東海山照源寺什物五百羅之珠数	109

難太平記194

野守鏡216

に

にきはひ草158~159
 西丸御婚姻被下沈香11
 西丸御書院番松平外記御番所にて相
 番刃傷一件498
 廿一日話44
 二拾番歌合385
 日蓮7
 日光紀行3
 日光山御宮御参詣之一件547
 日光魔所3
 日坂助次郎10
 日本一阿方鏡501
 日本外史御序文并頼山陽呈書362
 日本紀神代卷独見30
 日本声母字伝391
 二本松の由来6
 二鳴尊霊を吊ひ奉る言葉7
 入峰逆峰15
 入木抄224
 丹羽長秀近津明神寄進状34
 人間万事塞翁馬3

ぬ

鶴重藤之弓28

ね

根岸御所俳諧3
 猫誰の交和48
 年山紀聞抄記81~82
 念仏行者徳本儀伝通院役者へ御尋書 295

の

農具便利論抄記407
 濃州笠松天災一件295
 鋸引刑別22
 遊鋸山記138
 後見草78
 野々山家兜83
 信姫様御婚礼御道具被進行列411
 野村一件聞書写339
 野村供養塚213
 野村鎗御免84

は

俳諧懺悔文413
 俳諧先達の過去帳6
 俳諧復正論251
 俳家奇人談上・中・114
下・115
 梅松論抄記50
 俳談138
 俳優別14
 霸王樹頌10
 萩焼茶碗3
 萩原宗固施無畏の歌9
 白隠の歌56
 白蛇25
 馬具寸法記198
 白石手翰361
 白石紳書20
 白石幼課八歳之時より後修行中
 数ヶ条話525
 熬白豆文12
 伯民竹之賛109
 博約斎叢書398, 545
 箱根権現の宝物295
 箱根山縁起239
 橋断之禍137
 芭蕉翁絵詞伝101
 芭蕉奥義集140
 芭蕉句解140
 芭蕉翁米糧34
 芭蕉花34
 畠山家系図508
 秦川勝像83
 波多野室歌57
 鉢植生育抄101
 八王寺御屋敷84
 八天宮別号263
 初君の碑14
 八歳にて子を産182
 八宗十刹15
 八丁堀御屋敷御類焼84
 八丁堀御屋舖御類焼後御普譜御成就
 御祝儀之節御書院其外御節付327
 巴提使7

無刃打物	9
埴生涼風抄記	263
羽尾記	194
婆心録	515
馬場甚十郎	34
馬場町警者	1
馬場村孫左衛門	1
母を養ふ僧	1
浜嶋庄兵衛一件	53
林道春	101
林道春南光坊殿中間答	46
原方海道	14
原田伊予天草有馬にて覚悟之覚	90
榛名詣	12
播州御征伐之事	192
播州姫路物語	330
蕃薯植方	25
万世家譜	288~291

ひ

檜垣の謡	1
臂閣	28
東素山消息	184
東本願寺旅止	214
東野州聞書	136
東野州消息	184
百姓囊	30
樋口福本両氏追腹之時辞世	1
肥後侯と津山侯へ御報書	13
肥後物語	49
頃日囀抄記	15
久居の浦寄木	7
久松家の勝事抜書	336
秘史	497
日遣番匠抄書	9
備前少将光政花園会約	60
肥前国島原一揆始末記	544
肥前国嶋原一揆の次第	38
疲足菓	137
飛驒孝仙池之詩	139
常陸国うつろ船流れよりし事	14
秀吉公京都の開基御尋の事	44
一橋治済卿七十御年賀之節御拝領 并被進物等	90
一橋治済公宣旨并御歌	214

人丸像	83
人丸の伝	24
尾濃勢江等地震	263
火の車	6
日野資枝御都合点	335
披風直綴之制高倉家答書	109
百人一首聞書	358
百寮訓要抄	181
瓢箪の伝	56
備陽典録抄記	206
萍の跡	78
漂流御覧之記	別33
漂流橋杭の記	214
平塚照之助方古屏風より出し書付	295
昼寝弁	34
広居出雲同人妻孝道御称賛	12
広沢村異獸	25
枇杷園随筆	320
貧女布施歌	38

ふ

武隠叢話	77
楓軒偶記	507
夫婦の有卦の祝	16
深谷記	194
吹上御庭御三家方御覧被仰出	516
武鏡要録別集	267
復桑雑記抄書	254, 341, 393
婦久路考	329
袋草紙抄書	7
武家高名記抄出	51
武家拾要記	419
武家撃要	396
武功吟味集	別33
藤井堰掟	9
武士覚悟之書	111
ふち川の記	232
富士紀行	240
富士御覧日記	240
藤衣序	392
武士訓	別30
富士山抜	413
ふし女の歌	7
藤塚知明文	7
富士の狂歌	56

藤房卿	1
藤森社縁起	239
武州河越御城内天神縁起	60
武術秘歌	9
富士歴覽記	240
藤原良親卿	3
覽富見記	240
豊前小倉善政	382
武総一日行脚道の記	40
武叢口実	143
舞台格以下指物	84
舞台の御札	84
ふたたび笠の日記	269~270
二見濁文台之銘	294
武談	343
物価論	515
仏法帰依話	5
武道初心集	220~221
武徳鎌倉旧記抄書	38
船長日記抄記	別4
武馬必用	11
武迎心かけの覚	213
ふみひろけのちょ	38
フランス王オロシヤに降参	137
武林要話抄出	40
古川翁伝	437
ふるきをしたふ	6
古田重治	51
布留屋草紙	246
文化元子年九月十四日若年寄堀田撰 津守様より御尋にて被差出候元御 家人筋目之者承因	別35
文化九申年二月御沙汰書	11
文化十三年御沙汰書	38
文化十三年諸国大風雨御届書	38
文化十三年御転任御兼任御規 式書	38
文化十三年御転任一件	25
文化十三年二月の五月迄殿中御沙汰 ぬき書	25
文化八未年五月十三日客館(上使之 次第)	268
文恭世子言行録	295
文政五壬午御転任御任槐一件	111
文政五年常陸沖にて異国船に	

逢事一件	109
文政三十一月十二月御沙汰書ぬき書	83
文政三辰年北国筋洪水	111
文政十一年子秋靈芝之御祝	213
文政十三年夏廿露降たりといふ事	251
文政十丁亥春御昇進御位階一件	211
文政十二乙丑年江戸大火	213
文政十二年丑三月廿一日江戸大火 之次第	199
文政十二年丑十二月於大阪切支丹御 仕置一件	251
文政十年丁亥春御昇進御位階ニ付京 都御使一件	212
文政四年辛巳年十二月七日被仰出	109
文二和歌集	436
文廟御遺詔	別13
文明一統記	210
文禄ニ禁裡御能組	38

へ

平安紀行	232, 463
米庵墨談抄	23
米蝦	137
兵家茶話抄録	490~491
平義器談	116
兵家茶話	462
秉燭譚	219
丙申紀聞	461, 464, 465, 469, 474, 490
兵原先生家塾規則	292
別所長治記	192
へひりの判官	34
辨のめのとの歌	14

ほ

芳雲集抄記	51
宝永大風	84
奉賀帳七八之巻抄記	56
奉賀帳抜抄	45
奉賀帳抄	40
蓬月様御辞世	256
悼亡師雪中庵蓼太人居士	376
鵬雀問答	463
方丈記	209
北条家分限帳	88
北条五代記抄記	56

三嶋曆拔書	560
水谷信濃守	80
水谷消息	560
水野善左衛門	2
水野爲長戒の歌并返歌	1
水野爲長より押花に添られし歌并 かへし	5
御衣野村太刀掛之松御刀掛	293
御台様御送別御歌	263
御台様御追福御歌	1
みちのさち	87
通村卿東海道紀行	368
道ゆきふり	230
御杖の御歌	434
光成卿の歌	34
光榮卿齋聖院様御追善御經書写并歌	84
光榮卿象歌	214
光榮卿不二の歌并佐夜中山あふくま 川埋木の歌	11
光榮公狂歌	4
光榮公鳥のねの歌	34
光広卿盆山銘	38
水戸自息軒詩歌会	334
水戸瑞竜山碑銘	22
水戸中将斎昭卿御詠并統桃源行	251
水戸より仙台へ書翰	3
源顕基	14
源義家朝臣(付観修僧正陰陽師清 明医師忠明之名誉)	8
源頼光大江山登山執達	2
美濃国不破故関銘并序	320
三輪録	355
耳囊	74~75
三宅堅恕より申来候文字留	293
都のてふり	88
都良香	1
都林泉名勝図会略抄	301
宮本武藏書	22
妙戒法尼	385
茗荷集抄記	138
妙国寺蘇鉄	28
妙法寺記	363
三好別記	196
三好家成立之事	196
みるめの波	362

三輪の鳥居	3
-------	---

む

夢庵記	209
むくら	439
向築地浴恩園景地名所碑和歌	293
武蔵志料抄記	257~262
むさし野の紀行	234
無人島漂流一件	39
無声の蛙	48
夢想嵐山歌	34
陸奥州磐手郡北上山新通法寺縁起	116
無能猿論	13
無明抄	50
無名翁茶話	333
無名類書	10
室の八しま	11

め

名歌よみて異名つきたる人	3
名称通考	23
明君白川夜話	475
名香六十一種聞方秘録	392
名所今歌集	247~249
名人左衛門	51
明暦火災	56
明暦明和火災	11
メンコル人手形	182

も

蒙斎先生御悼之御歌	202
蒙斎先生手簡	別7
蒙斎先生より送れる詩和歌を以 和せし事	251
蒙斎先生悼御歌并諸生詩文	213
孟子の卒去	6
茂木筆記	76
文字摺の御ふみ	13
本居宣長源氏物語注釈	388
元春の妻女	51
本山河内家藏先祖聖前守安政河内守 安行父子戦功覚書	183
物の名も所によりての連歌	3
木綿渡	60
桃川神社	13

桃の若葉	517
百羽かき	57
森彦太郎一件	14
文覚行路鈔抄記	56
文覚上人消息	209
主水白月すむ秋	15
門徒ノ属迎僧尼	137
主水の幽霊ノ画	7

や

夜鶴庭訓抄	224
八木兵助息	56
焼松炙	別22
野州足利郡上川崎村百姓逸八後家は つ行状書	111
屋代弘賢祭文	53
泰時御消息	209
安永久右衛門	8
柳川川柳	2
矢吹八幡	2
野夫談	別26
山鹿素行物語	143
山形侯西丸大手御番中曲瀬市右衛門 乱心一件	295
山県大式一件	88
山口道濟物語記目錄	508
山下幸内言上書	330
山田行役米戻	84
大和名所図会拔萃	301
山野部富士	22
従山本平大夫中路右平次へ送ル 所之書	338
山本門五郎消息	11
鎗の濫觴	5

ゆ

油井丸橋	別22
結城白川系図	80
結城戦場物語	194
遊行上人の歌	28
遊行柳	38
遊芸堂次筆抄	299, 300, 305~307, 324, 328
祐七に与へしふみ	90
有職二宮問答	560

有徳院様御召一旦と云御馬之事	516
雄藩雑話	14
有方録	173~174
諭俗要言	182
涌蓮玄仲か歌	9

よ

妖異部成大会	22
陽光院殿	84
妖虎禁文	560
養蚕全書	469
擁書漫筆	463
養老美泉弁抄記	294
陽祿門院三十三回忌記	201
義貞記	198
吉田三位鶉歌	34
吉田忠左衛門状	60
義経の笈	3
義輝公御辞世	57
義朝公御最期之絵解(版本)	516
よしの冊子	453~458, 466~468, 481~489
吉野拾遺	208
吉野の古文書	9
吉野詣記	234
好古の歌	38
吉宗公被仰出	336
吉村氏の元祖	14
吉村宜典追善歌其外歌四五首	251
由分田介	4
四物成始	202
四谷西念寺	14
淀御旅館	84
淀ニ而御拝借金	84
淀殿文書	83
世の手本	86
呼子鳥	38
よもきふ	377
よものあか	331
四方硯	297
予養子の祝句	7
世々の姿序	4
世々の姿抄	別36
頼朝卿御教書	137
頼朝佐々木ニ被下状	209

ら

頼久太郎書牘213
 樂戒213
 樂訓抄録372
 樂亭かな筆記390
 洛陽般舟三昧院記201
 蘿徑記320

り

六園花見記418
 理慶尼記498
 利生護国寺縁起28
 於立教館東陵先生演説202
 栗山柴先生学則28
 栗山先生手簡別12
 立圃駅路記501
 柳営私記120~124
 柳営秘鑑婦女伝系312~314
 柳営夜話1
 竜蓋寺略縁起341
 琉球人詩歌9
 琉球人漂流57
 琉球人の歌56
 竜蔵権現奇特56
 竜の宮物語407
 竜法山大徳寺歴代并免道黄檗山万福
 寺歴代320
 了以碑銘263
 兩岸記行16
 良山堂茶話抄記242
 了俊浜名の歌38
 了然禪尼3
 両之御旗84
 緑野園隨筆443
 旅中異変之始末408

る

浜襟集別23
 類例略要集543
 留守居翁問答42

れ

靈巖寺円海の歌56
 麗玉集別11

冷泉家御息女右衛門殿御歌1
 暦号難陳385
 歴代吟501
 烈婦栗女碑銘111
 連歌の賭物57
 連歌良材抄記43
 蓮華王ノ壺138
 鎌道三要之書330

ろ

老公鶯の御歌84
 老公御壁書34
 老子2
 老子形気抄記53
 老人雑話抜書11
 鹿苑院殿巖鳴詣記230
 六七帖抄記437, 438
 六十番歌合368
 六物新志28
 魯西亜より戻漂流人長崎にて
 御尋一件39

わ

若君様山王御宮参御行列15
 吾国を夷狄2
 和歌三神考30
 わか浴恩園の事をしるす390
 和歌を蝦夷語57
 脇坂家中敵討382
 脇坂義堂心相問答別32
 脇坂家御称美80
 和語連珠集抄記43
 禍は口より出15
 渡辺勘兵衛覚書4
 渡辺幸庵對話記459
 渡部才右衛門乳母4
 王仁像83
 倭名婦実記40
 (たぐち・えいいち 図書部古典籍課)